

美月力赤り

高村宗平印



昭和十七年七月

高村光太郎著

詩集 大いなる日に

道統社 版

大いなる日に
高村光太郎



高村光太郎著

詩集 大いなる日に

道統社 版

高村光太郎著
大いなる日に
道統社



KH577

J1



I種

W



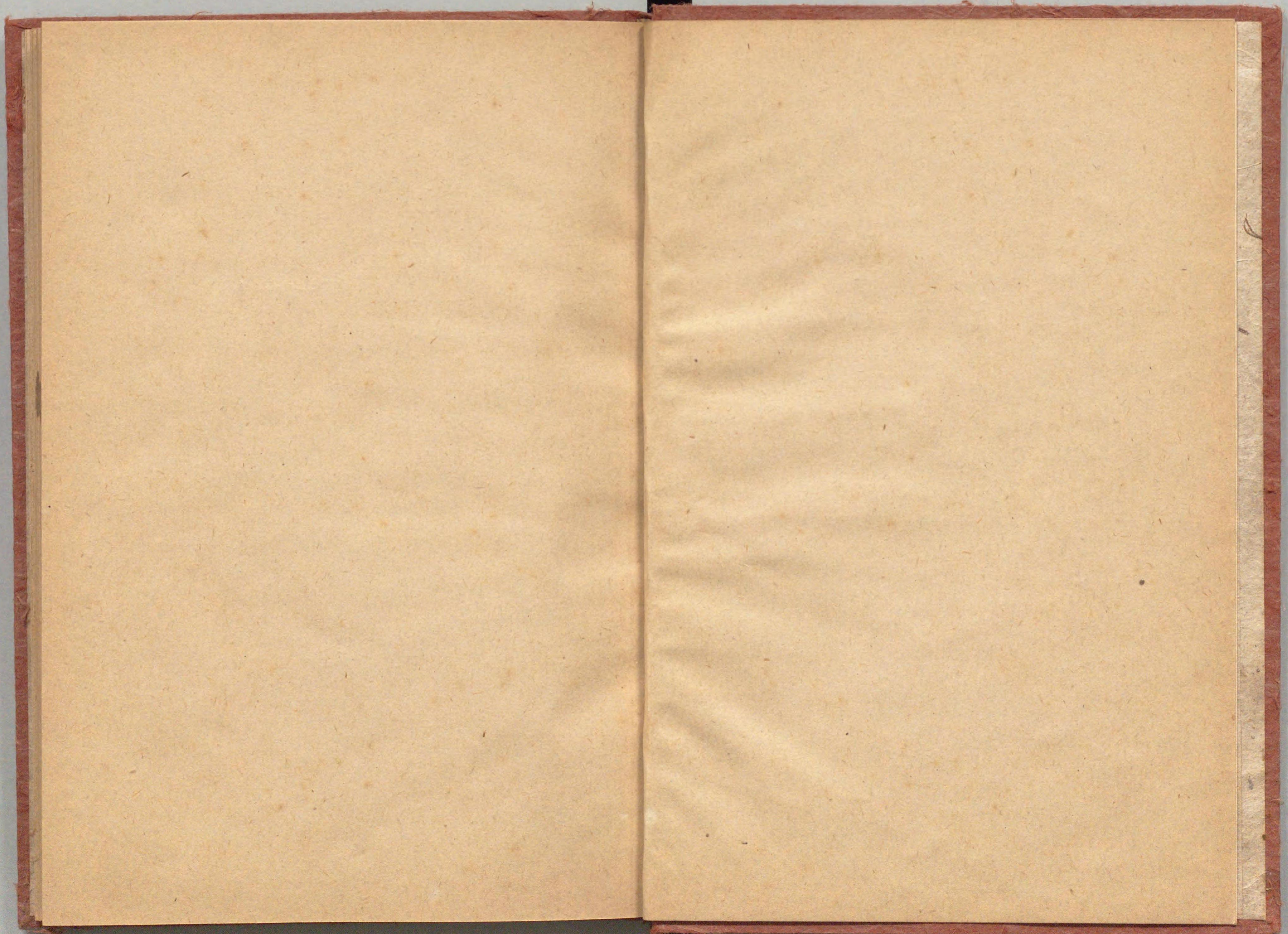
1200900244282

序

支那事變勃發以來皇軍昭南島入城に至るまでの間に書いた詩の中から三十
七篇を選んでここに集めた。ただ此の大いなる日に生くる身の衷情と感激と
を傳へたいと思ふばかりである。

昭和十七年三月

高村光太郎



目次

序
目次
秋風辭……………三
夢に神農となる……………七
老聃、道を行く……………二
天日の下に黄をさらさう……………一七
若葉……………二
地理の書……………一五
その時朝は来る……………三五

群長訓練……………三九
正直一途なお正月……………四三
初夏到来……………四七
事變二周年……………五
君等に與ふ……………五五
銅像ミキイキツツに寄す……………五九
紀元二千六百年にあたりて……………六三
へんな貧……………七一
源始にあり……………七五
ほくち文化……………七九

最低にして最高の道	八三
無血開城	八七
式典の日に	九一
太子筆を執りたまふ	九五
われら持てり	九九
強力の磊塊たれ	一〇三
事變はもう四年を越す	一〇七
百合がにほふ	一一一
新穀感謝の歌	一一五
必死の時	一二九

危急の日に	一二五
十二月八日	一二九
鮮明な冬	一三三
彼等を撃つ	一三七
新しき日に	一四一
沈思せよ蔣先生	一四七
ことほぎの詞	一五五
シンガポール陥落	一五九
夜を寝ねざりし曉に書く	一六五
昭南島に題す	一七一

詩集
大いなる日に

秋

風 辭

秋風起兮白雲飛
艸木黃落兮雁南歸

—漢武帝—

秋風起つて白雲は飛ぶが、
今年南に急ぐのはわが同胞の隊伍である。
南に待つのは砲火である。
街上百般の生活は凡て一つにあざなはれ、
涙はむしろ胸を洗ひ
昨日思索の亡羊を歎いた者、
日日缺食の惱みに蒼ざめた者、
巷に浮浪の夢を餘儀なくした者、
今はただ澎湃たる熱氣の列と化した。
草木黄ばみ落ちる時

世の隅隅に吹きこむ夜風に變りはないが、
今年この國を訪れる秋は
祖先も曾て見たことのない歴大な秋だ。
遠くかなた雁門關の古生層がはじけ飛ぶ。
むかし雁門關は西に向つて閉ぢた。
けふ雁門關は東に向つて碎ける。
太原を超えて汾河渉るべし黄河望むべし。
秋風は胡沙と海と島島とを一連に吹く。

——昭和十二年九月二十九日——

夢に神農となる

木の葉の衣を着て草を嘗め、
日に千里を走つてゆうべ、
夢に神農となつた。
わしが木を斫つて鋤と爲し
木を揉めて耒と爲したのも昨日のやうだ。
五絃の琴を作つた折の民の歡びも昨日のやうだ。
わしは陳から曲阜に徙つて
悠悠草根木皮の良毒を究めた。
晩年天下亂れて黄帝に取つて代られたが、
それも亦おもしろいと思つたものだ。

興亡幾千年の歴史に異議は無い。
現實そのものは押し流れる渦卷だ。
わしの眼の前でいま黄河の水に血がしぶく。
やみがたい力の移動は一切を呑む。
わしは今でも靜に一本の青い草を銜へてゐる。
太昊伏羲の漁獵牧畜時代のあとをうけて
わしが農耕の道をひらき、
黄帝が算數を作り律呂を制したやうな歩みこそ、
世の浮沈盛衰を貫く別箇の絶對面であるからだ。

老聃、道を行く

象のやうに耳の大きい老先生は

水牛の上にもろくうづくまり

時の歩みよりもひそやかに

太虚の深さよりも物しづかに

晴れ渡つた秋の日ざしにとつぷり埋れて

どこまでもつづく陝の道を西へ行く

函谷關で書いた五千餘言の事だけが

老先生のちよつと氣になる

莽莽蕩蕩

黄河の水が愚かのやうに東に流れる

老先生は鬚もじやの四角な口を結び

大きなおでこの下の小さな眼をあげる

河岸のまばらな槐林が黄ばみ落ちる

黄土の岩に秋の日はあたたかく

人も通らず鳥も鳴かない

風景は老先生の心を模倣し

自然は老先生の形骸をよるこび迎へる

わしは堯舜の教を述べるに過ぎない

坦坦たる道を示すに過ぎない

天下の百姓ひやくせいの隠れた生活を肯定し
星宿その所に在るを説くに過ぎない
世を厭ふのでなくて
世にもぐりこむのだ
世は權勢のみで出来てゐない
綿綿幾千年の世の味ひは百姓の中に在る
わしが逆な事ばかり言ふと思ふのは
立身出世教の徒に過ぎない
其の無に當つて器の用有るを悟る者が
滿天下に充溢する叡智の世は來ないか

爲して争はぬ事の出来る世は來ないか
ああそれは遠い未來の文化の世だらう
人の世の波瀾は乗り切るのみだ
黄河の水もまだ幾度か干戈の影を映すがいい
だが和光同塵も夢ではない
わしの遺した五千餘言よ人をあやまるな
わしのただ言よ奇筆とは間違へられるな
わしの教よ妖教の因となるな
わしは此世にもぐりこんで死ぬ
龍となつて天に昇つたなど人よ思ふな

白い小さな雲が南の方泰嶺に一つ浮んで
自然にわいたままちつとしてゐる
老先生は溶けたやうに其を見てゐる

—昭和十二年十二月十二日—

天日の下に黄をさらさう

祖先是川に禊して穢れを祓つた
ただ白木の柱を立てて家を築いた
きよらかな比例そのもののみを命とした
眼にとまる塵一つ無いのを
一切の美の極みとした
袖を拂つて今わたくしが魂にきくもの
とほく深く又まことに己みがたい
貪婪多彩の文化をくぐつて
世に斯くばかり潔く切なく勁い美が
一つの道とまでなつて興るのを

心ねぢけぬ輩は否むまい
氷を割つて川に身をそそぎ
今こそ天日の下に黄をさらさう
萬人共にうけた稟性を世界の前に
かくすところなくさらけ出さう
臆するところなく育てよう
巷に竹と松とが繁茂する
わたくしは大根をぶらさげて街を歩き
此の道美しけれど絶えず窮乏につづく事を思ひ
むしろ心たのしい決意にさびしく笑つた

昭和十二年十二月三十日

若

葉

ゆるく波うつ武藏野の起伏を
今は見渡すかぎり若葉の軍がみなぎる
六月の太陽は水をふくんでかぎろひ
六月の大地は身うちに溢れる精氣を吐く
みどりにけむる一望の風景は
何かを用意し何かを待ちうけ
しんとして青年の純潔の美を展開する
純潔なるもの天地に満ち
そのかをり快く顔をうつ
ここかしこに點在する赤松の森は

軍を護る砦のやうだ
たちまち爆音をたてて森すれすれに
練習の偵察機が飛ぶ
すべて若くめづらしく
冒険の可能を約束し
知られざるものへの牽引
新らしき経験への初一步
既にあるものを超えて
未だあらざるものへの進展
道ゆくわたくしは此の烈々の氣魄をあびて

地理の書

むせ返るやうな精神の飽和におどろき
路傍に高く手を伸ばして
目にとまつたタランボの芽を摘み
静かに今夜の夕餉の事を考へた

—昭和十三年四月十四日—

深い日本海溝に沈む赤粘土を壓して
九千米突の絶壁にのしかかる日本島こそ
あやふくアジヤの最後を支へる。
崑崙は一度海に没して又筑紫に上る。
兩手をひろげて大陸の没落を救ふもの
日本南北の兩彎は百本の杭となり
そのまん中の大地溝フォッサマグナに富士は秀でる。

この地わかく火を藏し火を噴き
地下水熱湯となつて流れあふれ

一切のもの内に深く激越の情を蓄へ
しかも湛へては靈泉の温雅となる。
輝石安山岩は北方の城壁
角閃安山岩は南方の砦
空高く内奥のガスを吐いて
この列島は聳え立つ。

大地のブロック縦横にかさなり
断層數知れず
絶えずうごき

絶えず震ひ

都會はたちまち灰燼となり

海はふくれて津浪となる。

決してゆるさぬ天然の氣魄は

ここに住むものをたたき上げ

危険は日常の糧となり

死はむしろ隣人である。

錯落參差

山も河も岸邊も野原も

入念に刻まれ叮嚀に仕上げられ

裏まですてず研がれ磨かれ

鷹のやうに敏く

燐のやうにあやふく

天地の毛細管はこゝにあつまり

神経の末端は露出する。

日本列島をかこむもの水

日本列島をつつむものまた水。

湿度一〇〇の一〇〇

氣流は常にサイパンあたりから生れ
黒潮に乗つて膨脹する。

靄と霧と雨と雪と

この榮養の飽食に

人は袒裸をよるこび

青葉若葉は富士をうづめ

石の殿堂は發汗する。

水蒸氣この島にぼかしをかけ

天然の恐^{こは}もてを中和する。

天象の眼はうるみ

睫毛ながく影をおとし

色にどぎつゝいもの無く

香りに鼻をつくもの無く

鳥獸蟲魚群を成し

草木みやび

物みな品くだらす

決然としていさぎよく

淡淡として死に又生きる。

稲の穂いちめんになびき
人満ちみちてあふれやます
おのづからどつと堰を切る。
大陸の横圧力で隆起した日本彎が
今大陸を支へるのだ。
崑崙と樺太とつながる地脈はここに盡き
うしろは懸崖の海溝だ。
退き難い特異の地形を天然は
氷河のむかしからもう築いた。
これがアジャの最後を支へるもの

日本列島の地理第一課だ。

—昭和十三年五月九日—

その時朝は来る

霜は夜明けに降る。

嵐は夜のひき明けに樹を倒す。

夜明けは荒く、たけく、力あふれ、

さうして朝はしづかに来る。

嵐はいま世界の東の果に吹きすさぶ。

丑寅の風は大陸の山と河との形を變へ

いのちといのちと相撃ち

血は鐵とベトンと黄土とに流れ、

肉は足の踏む所目の視る所に横はる。

しかも此等一切のものを濯がうとして

天の水どうどうと落ちる。

夜は明けようとして一きは暗く、

もの淨まらうとして力荒らび、

この力吹き抜けて天に果てる時、

その時東方に朝は来る。

眼を洗ふばかりあざやかに

一切新規まき直しの朝が来るのだ。

群
長
訓
練

この夜明方の出しぬけの警報には
みんな慌てたやうですな

どてらに戦闘帽

長襦袢にエプロン

夜がしらしらと明けてくると

霜のおりる往來にふるへてゐるのは

まことに奇怪至極の行列です

遠くの方ではさかんに銃聲が聞えるのに

この高臺の一くるわでは

じつさい申しわけの無い次第です

しかしわれわれ同胞のほんどの意氣は
いざといふ時でなければ出ませんよ
焼夷弾の落ちた家は天災とあきらめて
一軒犠牲になるのです
われわれはぜつたい延焼させませんよ
何しろ敵の夜襲を野崎詣りとしやれる
さういふ兵隊さんの親兄弟ですから
少少ぐらゐるな不體裁はむしろ氣が強いです

——昭和十三年十二月四日——

正直一途なお正月

正直一途なお正月は
少し無器用にぎごちなく
しかし断じて譲らぬ決意のやうに
今ベイリングの海の方から上陸してくる
ことし吾等はいささかの竹と小さい松と
ますます固めた覺悟のほぞとで彼を迎へる
劣等人種と彼等のきめた
その劣等が何を意味するかを
天地の前にあかし證しようと裸になつて
けなげに立ち上つた民族の直情を

正直一途なお正月は理解するだらう
頭をなぐるのも善意だといふことを
あのブロンドオなら悟るだらうか
ああ正直一途なお正月よ
よく吾等の真相を見きはめて
それから西方の經度に歩を運べ
善意を悪意ととられても
白隠さまは昔平氣でゐたが

——昭和十三年十二月二十三日——

初
夏
到
來

若葉の梢に水ながれ
巨大な魚族天にあり
をんなの腋に翼生え
世は五月の匂にみちる
この時電波は西歐の一角に密集し
極東に法幣の覆面魔はをどる
天然は上氣して胸をふくらまし
手のつけやうも無い顔をしてゐる
わたくしは菖蒲の葉を風呂にかべ
身をきよめて衣を更へ

かういふ五月の日本に來たのを
まづその手答を満喫しようど肚をきめた

—昭和十四年四月二十九日—

事變二周年

まる二年たつた。

大理石の溝橋はもう静かな夏の夕だが、

あれから大陸の半分には血が流れ血が拭はれ、

幾重にも底のある怪物の

見えて見えない正體を押へこまうと、

今日も國民はいのちを捧げる。

峠のむかうに峠があり、

紐をたぐれば何が出るかは、

それは分りきつてゐる。

植民地支那にして置きたい連中の貪慾から

君をほんとの君に救ひ出すには、

君の頭をなぐるより外ないではないか。

われらの「道」を彼らの利權に置きかへようと、

世界中に張られた網の目の中で

今日も國民はいのちを捧げる。

二年はおろか幾年でも

國民は必死の肚をきめてゐる。

必然の宇宙理法はどうとうと流れる。

—昭和十四年六月二十八日—

君等に與ふ

長い間支那南北を争はせて
漁夫の利をせしめてゐたのは誰だ
今又日本と支那とを喧嘩させて
同じ利をせしめようとしたのは誰だ
だが今度の東亞の内亂は
さういふやうにはをさまるまい
兄弟喧嘩をしてゐるうちに
東亞の人間は眼がさめて來た
今度のいくさをきつかけに
君等の鎖は斷ち切られる

君等の網はやぶかれる
理不盡な阿片戦争當時の夢を
君等もまさか今持つてはるまい
神のものは神にかへせだ
われらは黄いろい人種だが
黄いろい人種は古來のんき過ぎたので
善良は馬鹿と見られ
とんちきはするいと見られ
沈黙は無思想と見られ
没法子しかたがなぢやと自分でも言つてゐたのだ

日本は東亞の末つ子だが
目がさめてから六十餘年
臥薪嘗膽といふ奴をやつてゐたのだ
めりめり勉強して待つてゐたのだ
君等の手から東亞を自由にしたかつたのだ
時が來たのだ
歴史の歩みかたはのつびきならぬ
われらは一人のこらす死ぬ氣である
死んで生きる道をとるばかりだ

—昭和十四年七月十三日—

銅像ミキイキツツに寄す

巴里アルマ橋畔に建つてゐる詩人よ。

ポオランドの流浪詩人ミキイキツツよ。

彫刻家ブウルデルがどんな正義の念に燃えて

巨弾におびえる巴里の工場で君を作つたか。

私はその話を知つてゐる。

君はポオランド獨立を叫んで民族を歌ひ、

諸國の志士を詩で鞭うち詩で呼びさまし、

コンスタンチノオブルでコレラで死んだ。

君の詩はポオランドの血に活性を興へた。

つひにピルスツスキ元帥が君に應へた。

ポオランドは獨立した。

一九二九年に建つた君の記念像は今でも

右手に巡禮の杖を重くつき、

左手をあげて天空に未來圖を描いてゐるか。

ポオランドの流浪詩人ミキイキツツよ。

天日の下萬邦の眼の前で

君の祖國は今また壊滅に瀕してゐる。

ヴェルサイユの机上の構想は四散する。

君を作つたブウルデルも既に亡い。

今も巴里アルマ橋畔に立つであらう君の姿を

遠く極東の一彫刻家は心にゑがく。

この力の究極するところいづこともなく、

むざんな人種戦争のとどろきを耳にし、

人類前途の茫漠を知る。

憤りなるか嗟嘆なるか決意なるか

ただ潜熱の如きもの身うちに痛きを感じる。

—昭和十四年九月二十一日—

紀元二千六百年にあたりて

二千六百年のむかしは昨日のやうだ。

その時わたくしも大和に居た。

みつみつし久米の子等がいのを捧げて戦ふ日にも、

命を承^{みことり}つてわたくしは別の事にいそしんだ。

或時は埴土を取つて八十平瓮をつくり、

或時は磐根をおこして石を切り

かすかすの曲玉管玉を刻み成して

八尺の瓊みすまるに縮ね、

或時は御佩刀のつかにもろもろの文をくじり彫り、

或時は染木が汁におん服の襦を染め、

又或時は片そぎの千木高しる宮の宮柱太しく立てた。

畝傍の山山に圍まれた國のまほら、

橿原のおん宮に大基をはじめたまうた日、

天皇を仰ぎてもろ人のあげた

あの雄たけびとよるこびの謠と

ああいやを、ああいやをの咲ぎの聲とがまだ耳にある。

二千六百年の後、

今またわたくしは此處に居る。

今はどういふ時だ。

天皇はわれらの親

その指さしたまふところ、

天然の機おのづから迫り、

むかしに變らぬ久米の子等は海を超えて

今アジャの廣漠の地に戦ふ。

アジャの民の眠りをさまし、

アジャの自立を世界の前に建てよう

一切をかけて血を流してゐるのだ。

むかし八十梟帥土蜘蛛の割據に悩むもろ人のため、

天下を定めて平和と文化の世をひらいた

あの遠つ祖の積極の道。

われらは世界に均衡の美をもたらし、

もろ人たがひに犯さず取らず、

いつの日か此の世の人みな天を楽しむに至るまで、

かの正しきを養ふ心を弘めようとするのだ。

われらはいたづらに敵を敵とせず、

ただ此の世の蒙きと荒きを闘かんとするのみだ。

さればわれらはみづからを範と成さう。

いにしへ人のやうにもう一度喫して身をきよめ、

地上のいかなる民にも恥ぢぬ國風を作らう。
おほらかに、あつく、光にみち、
およそ卑いひきもの低きものを内に絶たう。
亡びに至る爛熟の美を棄てて
つねに創はむるものなる根源の力に立たう。
肝膽をくだいて未知の世界を探り出さう。
大きくつかんで微びに入らう。
この世界の緑地帯から酸素に富んだ芳ばしい氣流を起さう。
あの雷雨のあとの目覺めるばかりの爽かさを
われらこそ八紘あめにきつと送らう。

—昭和十四年十一月二十六日—

へ
ん
な
貧

この男の貧はへんな貧だ。
有る時は第一等の料理をくらひ、
無い時は菜つ葉に芋粥。
取れる腕はありながらさつぱり取れず、
勉強すればするほど仕事はのび、
人はあきれて構ひつけない。
物を欲しいとも思はないが
物の方でも來るのをいやがる。
中ほごといふうまいたづきを
生れつきの業ごいがさせない。

妻なく子なきがらんごうの家に
つもるのは塵と埃と木片こくばかり。
袖は破れ下駄は割れ、
ひとり水をのんで寒風に立つ。
それでも自分を貧とは思へず、
第一等と最下等とをちやんぼんに
念珠のやうに離さない。
何だかゆたかな有りがたいものが
そこら中に待つてゐるやうで
この世の深さと美しさを

身に餘る思でむさぼり見る。
この世に幸も不幸もなく、
ただ前方へ進むのみだ。
天があり地面があり、
風があり水があり、
さうして太陽は毎朝出る。
この男のへんな貧を
この男も不思議におもふ。

—昭和十四年十二月三日—

源始にあり

はるかな歴史のやうでもあり、
一足とびのやうでもある。
二千六百年を貫くもの、
名状しがたい一つの氣質の骨格は、
われらをめぐる四つの海にまもられ、
氣壓の烈しい傾斜にささへられ、
われら民族の血の純潔と悠久とを
時間を超えて今新らしく自覺せしめる。
中世はかへつてふるく、
古代は直接にしてあたらしい。

われらはいま物の源始にあり、
一切はむしろ初代を意味する。
かかる時かかる年頭の空を仰いで
つよくきびしく自らをかへりみざらんや。
記紀の古しへに澎湃として溢れたるもの、
潤達にして萎靡せず、
自信にみちて天日の下に行ひ、
よく悲しみよくよろこび、
心ゆたかに六合を掩ひ萬方を容れ、
ああその大と剛との美なることよ。

薑はじかみの口ひびくともわれらは耐へて、
遠つみおやの魂を現實に
この生きたからだでほんとに生きよう。

—昭和十四年十二月三十日—

ほくち文化

ぼくちは少ししめつてゐたが
まだ結構火がついた。

石から飛び出る火花を捉へる、

こんな面白い生活があつたのかと

忘れてゐた世界を思ひ出した。

ぼくらはメリケンのやうに仕出し屋の

箱辨仕込の時間を持たないから、

ぼくちライターアの文化に立つに至るのが

むしろいちばん確かな生活のやうだ。

ぼくははこべを窓の下に養成して

毎朝これを粥に入れる。

ぼくは太陽熱を吸収させて

夜の寢臺にぐつすりねむる。

無いものは無いと思ふ。

すべて速度あるもの鋭利なるもの

一切の資材は戦ふ人のものに屬する。

願はくは機械化兵器の前に同胞を死なしむるな。

ぼくはぼくち文化に腰を据ゑて

いよいよ本式にあぐらをかかう。

かうなれば悠悠たる美の本質が

一切のざわめきを超えて此世に可能だ。

人間世界の前途はながい。

乏しさは即ち豊かさ。

おかげでぼくは天地と共に閑閑たりだ。

—昭和十五年一月十一日—

最低にして最高の道

もう止さう。

ちひさな利慾とちひさな不平と、

ちひさなぐちとちひさな怒りと、

さういふうるさいけちなものは、

ああ、きれいにもう止さう。

わたくし事のいざこざに

見にくい皺を縦によせて

この世を地獄に住むのは止さう。

こそこそと裏から裏へ

うす汚い企みをやるのは止さう。

この世の抜駆けはもう止さう。

さういふ事はともかく忘れて

みんなと一緒に大きく生きよう。

見えもかけ値もない裸のところで

らくらくと、のびのびと、

あの空を仰いでわれらは生きよう。

泣くも笑ふもみんなと一緒に

最低にして最高の道をゆかう。

—昭和十五年七月十日—

無血開城

(わが愛するフランスの爲に)

江戸の無血開城は日本の夜明となつた。
パリの無血開城はフランスの何を物語る。
江戸にはせめて彰義隊がゐた。
パリには唯脂粉の女と太公望とがゐた。
フランスの頭腦は物わかりよく、
ペタン將軍は何が悪いかをよく知つてゐた。
戦を欲せざる國民に戦を強ひたのは誰か。
マジノ線をうまく利用せんとした老獪の徒は誰か。
海を越えてフランスを抱きこんだもの、
利をくらはせてフランスを過たしめたもの、

アアサア王の裔は今頭上の鐵槌を見上げてゐる。
此の大戦は前大戦のつづきに過ぎず、
前世紀的均衡が時代の訂正をうけてゐるのだ。
わが愛するフランスの國民よ。
かつては一少女の奇蹟に甦り、
今は戦ふ意志なくして戦に敗れた國民よ。
せめて古き文化を護つた者を多として忍べ。
政治の傀儡たる戦は勝たず、
理想の大義無きところ何人か起たん。
わが愛するフランスの國民は

つひに謬れる政治に抗して自ら敗れた。
フランスは光榮ある文化を荷つて
重税の下に明日を行かう。
物理は力學の理法を曲げない。
わが愛するフランス土着の民よ。
政治を超えて今こそ君等が
あのゴオルの強靱さに立ちかへる時だ。
文化がいかに民族を救ふかを證^{あかし}する時が來たのだ。

—昭和十五年七月二十三日—

式典の日に

二千六百年を経て地は明らかとなれり。
地はあますところなく吾等の前にひらけたり。
いま地上に住むもの皆かくすところ無し。
海原うきはらは水戸みととなり、
大空は世の最短距離となれり。
人類は互にその長と短とを知り、
國土は互にその持つと持たざるを知れり。
かかる時人類なほ利己の蠻風を追ふべからず。
地上の者なほ我利の繩張りに執すべからず。
世界動亂はこの新しき道への

無殘な模索を意味せざらんや。
畝傍山の東南樞原の地を指したまひて、
宏遠の古しへ、
吾等の皇祖すでにこの事をみことり令す。
人類互に扶けて一家の如きに至るまで、
吾等はそのみことりのまゝに進まん。
大きなる平和やはらの日を地上に布くに至るまで、
吾等斷じてかへりみはせじ。

—昭和十五年十一月八日—

太子筆を執りたまふ

なだれこむ大陸文化は精神の厚さ極まりなく、
その横圧力、日本列島を曲げようとする。
日本に神神の道あつて鏡のやうにかしこけれど、
すでに漢人高麗人百濟人ら
文化の尖銳に立つて要路にあふれ、
豪族並びおこつて互に未知の知性を研ぐ。
されば國を憂へる者ひとへに暗く文化を拒み、
三寶の大千世界性を觸知せず。
斯の如きは此の民族の道にあらず、
進んでやまぬ神神の掟でもない。

國論統一すべし。

物部守屋は滅び、

蘇我馬子つひに大逆を果す。

やんぬるかな、太子長大息せさせたまふ。

斑鳩の宮を春の日は素絹の光につつま、

大和の土は陶土のやうに明るく、

岡の松には豎琴のひびきがある。

太子はゆるやかに岡をあゆませ、

手に砂を取られて砂質を見たまふ。

佛像造顯の眞意人知る無し。

太子しづかに宮に入りたまひ、

筆を執つて一片の紙に書きたまふ。

以和爲貴無忤爲宗。

又一片の紙に書きたまふ。

承詔必謹。

太子の眉みまゆに白毫光はほのめきただよふ。

—昭和十五年十二月十日—

われら持てり

彼はいふ、われら持てり。

神の國なるかな、

今に至るまで、地下の埋藏を

人知るが如くしてまことは知らず、

目前の利に走りてこれをあばかず、

却て今日の困阨に備へたり。

地震國なるわれらの國土、

地下に必需の鑛脈を蓄ふ。

萬を以て數ふべからず、

億を以て數ふべし。

利を追ふもの利を得ず、

利を捨つるもの國土の利を發見す。

神の國なるかな、

今にして必需のものわれらに與へらる。

彼はいふ、われら持てり。

新年にして彼の言を銘記す、

これ萎靡退嬰を戒ふの詩なり。

—昭和十五年十二月三十日—

強力の磊塊たれ

現世否定の鞭をふるつて、
無限未來のあの時空の間に
遠く人間として生きてゐた魂が、
この肉體の叫ぶ聲をきいたのだ。
八萬由旬を一瞬にして立ちかへつたのだ。
民族の血は私の魂にしぶきかかる。
世界動亂の修羅ののろひに、
われら斷じて勝つほかない。
天に近いポッドをくだつて、
ア ज्याを縦斷したモンクメルの話は知らず、

われら民族は今死力を盡してア ज्याの生成を遂げるのみだ。
われら民族の滅却を望まぬものは、
ひとり否定の帆柱によちのぼつて
この動亂の見物人となることなかれ。
われら民族の念慮に水をさすな。
君の高級精神をもて要路の低俗をも壓倒せよ。
シニシスムは實り多からず、
樸々としてただ如何にすべきかに猛進せよ。
この危急存亡のとき、
むしろ齒ぬけの獅子となつても、

われら同胞の魂を内から支へる強力の磊塊たれ。

——昭和十六年五月十二日——

事變はもう四年を越す

わたしは六階の窓に立つ。
さみだれけむるお濠の緑のかなたに、
赤い煉瓦のかさなり、
高いアンテナと黒い明治の尖塔と、
その又上に遠くかすかに
あの議事堂の白いドーム。
このパノラマのいちばん下を
ひけ時の群集と電車がうごく。
事變はもう四年を越す。
時は人の意表をゆき、

世界は見えざる歴大な力のもとに喘ぐ。
今こそわれら新しきいのちにめざめて、
一切の邪魔を破り、
民族を貫く一本の槍となつて
一千四百六十餘日の意味する決意を
アジャの空に遂げねばならぬ。
憂鬱は敵だ。

この眼前の風景をもう一度描き直す者よ、起て。

—昭和十六年六月二十一日—

百合がにほふ

どうでもよい事と
どうでもよくない事とある。
あらぬ事にうろたへたり、
さし置きがたい事にうかつであつたり、
さういふ不明はよさう。
千載の見とほしによる事と
今が今のつとめとがある。
それとこれとのけぢめもつかず、
結局議論に終るのはよさう。
庭前の百合の花がにほつてくる。

私はその小さい芽からの成長を知つてゐる。
いかに營營たる毎日であつたかを知つてゐる。
私は最低に生きよう。
そして最高をこひねがはう。
最高とはこの天然の格律に循つて、
千載の悠久の意味と、
今日の非常の意味とに目ざめた上、
われら民族のどうでもよくない一大事に
數ならぬ醜のこの身をささげる事だ。

新穀感謝の歌

あらたふと

あきのみりの

初穂はつほをば

すめらみことの

みそなはし

とほつみおやに

神かみ神がみに

たてまつる日ひよ

いまは來きぬ

あらたふと

あきのみりの

田たの面もには

穂ほ波なみたわわに

しづもりて

神かみのたまひし

稻いな種ねは

いま民たみの手てに

糧かてとなる

あらたふと

あきのとりに

倉くらにみち

君きみにささぐる

國くに民たみの

いきのいのちの

はつらつと

いやきはひ立つ

時ときは來きぬ

—昭和十六年十月二十五日—

必
死
の
時

必死にあり。

その時人きよくしてつよく、

その時ころ洋洋としてゆたかなのは
われら民族のならひである。

人は死をいそがねど

死は前方より迫る。

死を滅すの道ただ必死あるのみ。

必死は絶體絶命にして

そこに生死を絶つ。

必死は狡智の醜をふみにじつて

素朴にして當然なる大道をひらく。

天體は必死の理によつて分秒をたがへず、

窓前の茶の花は葉かげに白く、

卓上の一枚の桐の葉は黄に枯れて、

天然の必死のいさぎよさを私に囁く。

安きを偷むものにまごひあり、

死を免れんとするものに虚勢あり。

一切を必死に委するもの、

一切を現有に於て見ざるもの、

一步は一步をすてて
つひに無窮にいたるもの、
かくの如きもの大なり。
生れて必死の世にあふはよきかな、
人その鍛錬によつて死に勝ち、
人その極限の日常によつてまことに生く。
未練をすてよ、
おもはくを恥ぢよ、
皮肉と駄駄とをやめよ。
そはすべて閑日月なり。

われら現實の歴史に呼吸するもの、
いま必死の時にあひて
生死の區區たる我慾に生きんや。
心空しきもの満ち、
思ひ専らなるもの精緻なり。
必死の境に美はあまねく、
烈烈として芳ばしきもの、
しづもりて光をたたふるもの、
その境にただよふ。

ああ必死にあり。
その時人きよくしてつよく、
その時こころ洋洋としてゆたかなのは
われら民族のならひである。

—昭和十六年十一月十九日—

危急の日に

「本日天気晴朗なれども波高し」と
あの小さな三笠艦がかつて報じた。
波大いに高からんとするはいづくぞ。
いま神明の氣はわれらの天と海とに満ちる。
われは義と生命とに立ち、
かれは利に立つ。
われは義を護るといひ、
かれは利の侵略といふ。
出る杭を打たんとするは彼にして、
東亞の大家族を作らんとするは我なり。

有色の者何するものぞと
彼の内心に叫ぶ。
有色の者いまだ悉く目さめず、
憫むべし、彼の颯使に甘んじて
共に我を窮地に追はんとす。
力を用ゐるはわれの悲みなり。
悲愴堪へがたくして、
いま神明の氣はわれらの天と海とに満ちる。

—昭和十六年十二月四日—

十二月八日

記憶せよ、十二月八日。

この日世界の歴史あらたまる。

アングロ・サクソンの主權、

この日東亞の陸と海とに否定さる。

否定するものは彼等のジャバン、

眇たる東海の國にして

また神の國なる日本^{にっぽん}なり。

そを治^{しよ}しめしたまふ明津御神^{あきつみかみ}なり。

世界の富を壟斷するもの、

強豪米英一族の力、

われらの國に於て否定さる。

われらの否定は義による。

東亞を東亞にかへせといふのみ。

彼等の搾取に隣邦ことごとく瘦せたり。

われらまさに其の爪牙を摧かんとす。

われら自ら力を養ひてひとたび起つ、

老若男女みな兵なり。

大敵非をささるに至るまでわれらは戦ふ。

世界の歴史を兩斷する

十二月八日を記憶せよ。

——昭和十六年十二月十日——

鮮
明
な
冬

この世は一新せられた。
黒船以來の總決算の時が來た。
民族の育ちがそれを可能にした。
長い間こづきまはされながら、
なめられながら、しぼられながら、
假裝舞踏會まで敢てしながら、
彼等に學び得るかぎりを學び、
彼等の力を隅から隅まで測量し、
彼等のえげつなさを満喫したのだ。
今こそ古しへにかへり、

源にさかのぼり、
一瀉千里の奔流となり得る日が來た。
われら民族の此世に在るいはれが
はじめて人の目に形となるのだ。
鶉が啼いてゐる、冬である。
山茶花が散つてゐる、冬である。
だが昨日は遠い昔であり、
天然までが我に返つた鮮明な冬である。

—昭和十六年十二月十一日—

彼等を撃つ

大^{おほみことり} 詔ひとたび出でて天つ日のごとし。
見よ、一億の民おもて輝きこころ躍る。
雲破れて路ひらけ、
萬里のきはみ眼前^{まなかひ}にあり。
大敵の所在^{あは}つひに發かれ、
わが向ふところ今や決然として定まる。
間髪を容れず、
一撃すでに敵の心肝を寒くせり。
八十梟帥^{やそなほ}のとも遠大の野望に燃え、
その鐵の牙と爪とを東亞に立てて

われを圍むこと二世紀に及ぶ。
力は彼等の自らたのむところにして、
利は彼等の搾取して飽くところなきもの。
理不盡の言ひがかりに
東亞の國國ほとんど皆滅され、
宗教と思想との摩訶不思議に
東亞の民概ね骨を抜かる。
わづかにわれら明津御神の御稜威により、
東亞の先端に位して
代々幾千年の練磨を経たり。

わが力いま彼等の力を撃つ。

必勝の軍なり。

必死必殺の劍なり。

大義明かにして惑ふなく、

近隣の朋救ふべし。

彼等の牙と爪とを撃破して、

大東亞本然の生命を示現すること。

これわれらの誓なり。

霜を含んで夜しづかに更けたり。

わが同胞は身を捧げて遠く戦ふ。

この時卓つくまに倚りて文字をつづり、
こころ感謝に満ちて無限の思切々たり。

—昭和十六年十二月十五日—

新
し
き
日
に

新しき年眞に新たなり。

東方の光世界に東方の意味を宣す。

幾千年の力蓄積していま爆發するのみ

東方は倫理なり。

東方は美なり。

斷じて西曆千幾年の弱肉強食にあらず。

世界の人類倫理に飢う。

飢うるものにわが食を與ふるなり。

わが食は道なり。

道を體するもの東方日出づる國に住む。

その一舉一動は中正にして愛に滿つ。

死はかく義はおもく、

古來東方の女性ことごとく美し。

その美驕らず出しやばらず、

内に湛へて堅忍の力あり、

男子みなその力に支へらる。

世界の歴史いま新たなり。

東方の倫理世界に布く。

美しき東方の女徳いよいよ凜たり。

沈思せよ蔣先生

詩の精神は疑はない。

なるほど政治の上では縁が無い。

蔣政權を相手とせずと、

かつて以前の宰相は天下に宣した。

けれどもわたくしは先生によびかける。

心が心によびかけ得るのを

詩の精神は毫末も疑はない。

わたくしはむしろ童子の稚なさに頓著せず、

遠く先生に此の言をおくる。

詩流、禮にならずである。

先生はいそがし過ぎる。

先生は一人で八方に氣を配る。

目前の處理に日も亦足りない。

米英的民主主義が右にゐる。

モスクワ的共産主義が左にゐる。

うしろには華僑が様子をうかがひ、

しかも面前にわが日本の砲火が迫る。

先生は一人でそれに當らうとする。

先生は思想と行きがかりとに憑かれてゐる。

何を爲つつあるかをもう一度考へるため、

先生よ、沈思せよ。

この一月の月あかき夜半、

先生は地下の一室に何を畫策する。

先生は人中の龍である人はいふ。

先生の部下である愛すべき青年將校から

わたくしもかつて先生の出處行藏をきいた。

先生は身を以て新生活の範を垂れ、

人みな先生に服すといふ。

わたくしも亦先生を偉とする者だが、

その先生に過ちが一つある。

抗日といふ執念を先生は何處から得たか。

東亞の強大ならんとするを恐れる輩、

先生の國をなま殺しにし、

わが日本の力を消耗せしめようとした

彼等異人種の苦肉の計を思ひたまへ。

兄弟牆に闘ぐのはまだいいが、

外その務あたどりを禦ぐべき時、

先生は抗日一本槍に民心を導いた。

抗日思想のあるかぎり、

東亞に平和は來ない。

先生は東亞の平和と共榮を好まないか。

今でも彼等異人種の手足となつてゐる氣か。

わたくしは先生の眞意が知りたい。

先生の腹心を披いて見せてもらひたい。

畫策にいそぐ時、人はまよふ。

一切を放擲して根源にかへる時、

天理おのづから明らかに現前する。

結局われわれは共に手を取る仲間である。

いくらあがいても、

さうならなければ東亞の倫理が立たない。

わが日本は先生の國を滅ぼすにあらず、

ただ抗日の思想を滅ぼすのみだ。

抗日に執すれば先生も亦滅ぶ。

わが日本はいま米英を撃つ。

米英は東亞の天地に否定された。

彼等の爪牙は破摧される。

先生の國にとつて其は吉か凶か。

先生よ、沈思せよ。

わたくしは童子の稚なさに似た言を吐く。
やむなき思にかられて
ただひたすらに情を抒べるのみだ。
先生に語るべき胸中の氤氳は盡きない。
あり得べくんば長江のあたりへ飛んで、
親しく先生を面責したいのだ。
むしろ多忙の畫策をすてて、
沈思せよ、蔣先生。

—昭和十七年一月十三日—

ことほぎの詞

久しいかな、二千六百二年。

さかんなるかな、けふのこのよき日。

始馭^{はつくにしらすめらみこと}天下之天皇、

橿原宮に大基^{あまつひつき}をはじめたまひてより、

かくの如き大いなる日あらんや。

われら畏みてけふの賀節^{よきひ}をことほぎ奉る。

まことにまことに値ひ難き日なるかな。

國をはじむるの意^{むね}いま新しく、

御稜威天と地とにきはまりて

わが東方幾千キロの妖^{わざはひ}まさに清まらんとし、

世界の倫理あらたまり、

人類の秩序また再建せられんとす。

これ遠つみおやの息吹にして

義^{ことわり}必ず時に随ふものならざらんや。

こころすがすがし。

今上陛下指さしたまふところ、

われらよろこびおもむくなり。

あきらけきかな、大いなるかな、けふの賀節^{よきひ}。

—昭和十七年二月九日—

シンガポール陥落

シンガポールが落ちた。
イギリスが碎かれた。
シンガポールが落ちた。
卓上の胡桃割に挟まれた
胡桃のやうに割れてはじけた。
シンガポールが落ちた。
力が力をねぢ伏せた。
シンガポールが落ちた。
彼等の扇の要が切れた。
大英帝國がばらばらになつた。

シンガポールが落ちた。
つひに日本が大東亞を取りかへした。
あまり大きな感激は
むしろ人を無口にさせる。
お伽噺にきくやうな
そんな猛獸毒蛇の巢に踏み入つて、
われらの同胞は戦つた。
あの米屋のむすこさんも、
あのお店の板前も、

あの哲學の研究生も、
あの訓導も、あの教授も、
われらの隣人が皆血を流して
文字通り面おもてもふらず突進したのだ。
言語にたえた強引に
油と火の海をも乗り越えたのだ。
空と海と陸との
こんな見事な一元化が曾てあつたか。

シンガポールが落ちた。

感謝の思ひに手がふるへる。

シンガポールが落ちた。

印度洋の波のやうに胸がゆれる。

シンガポールが落ちた。

殘虐の世界制覇者をつひに破つた。

シンガポールが落ちた。

傲慢なアングロ・サクソンをつひに驅逐した。

シンガポールが落ちた。

大東亞の新らしい日月が今はじまる。

シンガポールが落ちた。

大東亞のもろもろの民よ、共にきけ。
ああ、シンガポールがつひに落ちた。

—昭和十七年二月十二日、A・K・に渡す—

夜を寝ねざりし曉に書く

あのごッ、ごッといふ音は何だ。

あの轆轤たるごどろきは何だ。

あの堂堂として整然たるひびきは何だ。

あの止め度もなくつづく遠方の潮騒しほざめは何だ。

眼をつぶると何處からか聞えて来て

あの音がわたくしをとりまく。

シンガポールだ。

皇軍シンガポール入城を耳がきくのだ。

堂堂として整然たるあのひびきの中に

一切の決意と榮光とがある。

あの大おほみこと詔を承けた感激の日から、

奔流の勢で皇軍は巨大な強敵がうてきを撃つた。

目まひのするほど廣大な海のきはみ、

おぼえきれないほど多い島島と半島とに、

練りに練つた作戦の大構想はひろげられた。

まるで盤上の目のやうに

次から次へとあやまり無い力が憂然と鳴つた。

ハワイに大艦隊を即刻滅ぼし、

マレイ沖に沈まざる巨艦を沈め、

岩とベトンと遠謀深慮の香港を降し、
マニラを馘^{たひら}げて呂宋の昔にかへし、
今また自然の防壁密林を衝いて、
大陸の突端、搾取の力點、
自ら助くる者にして生活の格闘者と自稱する
強靱大英帝國の世界の足場、
鐵で固めたシンガポールをみりみり潰した。
屈服せざる者を屈服させた。
ああ斯くてわれらの瞬く間に
大東亞民族興隆の基地は全面に布石された。

眼をつぶると遠くざツ、ざツといふ音がする。
あれこそ世界に新しい理念を樹てる音だ。
眼をつぶると轆轤たる轟きがきこえる。
あれこそ英米的考へ方を踏みにじる音だ。
眼をつぶると堂堂として整然たる響きが聞える。
あれこそ東方の倫理が美を致す音だ。
しづかに暗い東京の雪^{ゆき}後^{あと}の夜はあけて
ただわたくしの耳にあの潮騒の音がきこえる。
この曉の神神しさよ。

わたくしはまづ身を淨めて國旗を出す。

—昭和十七年二月十八日—

昭南島に題す

獯猛の獅子つひに斃れ、
日輪いまその上にかがやく。
シンガポール白墨の文字の如く消え、
昭南島いまたちまち生る。
これ國生みなり。
昭南島獅子の血の上に生る。
活潑鱣地の極盡妙趣なり。
彼は民をくるしめ、
我は民をすくふ。
大東亞の門扉左右にひらく。

大なり、廣なり、出入無礙。
彼が持つや妖わさはひ。
我が持つや正し。
積年の窒息は放たれんとし、
いま新鮮無類の大氣、
まづマレイの突端に吹き起る。
昭南島の日輪まことに昭らかに、
昭南島の南十字星らんと天に高し。

——昭和十七年二月二十日——

(認承協文出) (號1004あ)



大いなる口

定價貳圓七拾錢

昭和十七年四月十五日印刷
昭和十七年四月二十日發行
昭和十七年六月二十日第二刷

發行部數 三、〇〇〇部

著者 高^{タカ}村^{ムラ}光^{クワウ}太^タ郎^{ラウ}

發行者 岩^{イワ}壁^{カキ}保^ホ

東京市向島區吾嬬町西一ノ五四
錦野印刷所

印刷者 岸^キ本^{ホン}義^ギ雄^{ユウ}

東京市麴町區有樂町一ノ一四

株式會社 道統社
電話銀座五四一一番
振替東京一六五五六一番
會員番號一二〇五七〇番

東京市神田區淡路町二ノ九

配給元 日本出版配給株式會社

高村光太郎著

B六判・和紙装箱入
定價二・八〇 送料・一四

美について

(第八刷)

〔文部省・日本出版文化協會推薦〕

著者の藝術に對する考へ方は、極めて健康であつて高雅、かゝる藝術精神が國民生活の全領域にわたつて生かされることが望ましい。藝術に携る人々ばかりでなく、一般の教養書として是非推薦したい。(推薦文の一節)



